

法学セミナー2019/01



ボブ・ウッドワード
スコット・アームストロング
(中村保男訳)
ブレザレン——アメリカ最高裁の男たち

TBSブリタニカ
1981年/四六判/598頁

法学者の本棚

司法の殿堂の人間模様

一橋大学教授

中窪裕也(労働法)

本書に出会ったのは、大学を卒業して研究室に入り、アメリカ労働法の研究を始めた頃である。ウォーターゲート事件の報道で名をはせたボブ・ウッドワードが、今度は連邦最高裁の内幕を描いた本を書いてベストセラーになったという(原書は1979年刊)。興味をひかれて読んでみると、600頁近くもある大著であるが、ぐいぐい引き込まれ、大河小説を読むような楽しさを感じながら、アメリカ法、さらには、それを取り巻く政治や社会の状況について、勉強することができた。また、法というものが純粋な理論ではなく、良くも悪くも人間的な営為の中から形成される(だからこそ面白い)ことに気づかされた。

本書が扱うのは、1969年度から1975年度までの期間である。リベラルで有名なウォーレン長官が引退し、後を継ぐはずだったフォータス裁判官がスキャンダルで辞任に追い込まれ、ダークホースのバーガー長官が就任するところから、物語は始まる。ニクソン大統領に任命された保守派のバーガー長官は、ウォーレン・コートが下した進歩的な判決を一掃することを目ざすが、リベラル派の裁判官たちと様々な場面で衝突し、妥協や画策を繰り返す。その間、人種差別撤廃、ベトナム反戦運動、ペンタゴン・ペーパーズ、人工妊娠中絶、ウォーターゲート事件など、数々の著名な事件を含む多彩な訴訟が最高裁に到達し、それらの処理をめぐる駆け引きが繰り広げられるが、時の経過とともに裁判官の顔ぶれも変わり、最後には中道派が実権を握ることとなる。

本書の魅力は、多くのエピソードの中から、各裁判官の個性や人柄を浮かび上がらせたところにある。詳しくはお読みいただくしかないが、たとえば、リベラル派の巨頭であるダグラス裁判官の頑固で怒りっぽい性格や、病気で倒れてから引退を受け入れるまでの長い抵抗ぶり、あるいは、バーガー長官の旧友で、最初は同じ保守派と見られていたブラックマン裁判官が、次第にリベラルな方向へと傾いていく姿は、印象に残っている。このブラックマン裁判官は熱烈な野球ファンで、大リーグの独禁法違反の事件では名選手リストの付いた野球讃歌のような判決案を書いたという話も、忘れがたいところである。

その後、さらに時は流れ、本書ではざっくりぼろんな人柄で新風を吹き込んだ若手(保守派の急先鋒)とされていたレンクイスト裁判官が、バーガーの後任として約19年にわたり長官を務めた後、2005年に就任したロバーツ長官が今の最高裁を率いている。1981年には初めて女性の裁判官が任命され、現在では9人のうち3人を占めており、本書のタイトルは時代を感じさせるものがある。ウッドワードは相変わらず健筆をふるっており、トランプ政権の内情を暴いた2018年の最新作も、大きな反響を呼んだ。そして2018年10月、トランプ大統領が指名したカバノー裁判官が(すったもんだの末に)上院の承認を得て就任し、ついに保守派の支配が確立された。このような現状を考えながら本書を読めば、いっそうほろ苦くて味わい深い読書体験となるであろう。